

ビデオ会議時の視聴者の映像の有無による 英語スピーチの自己評価と生じる感情の比較

小林 輝美^{1, 2}

¹ 教育テスト研究センター ² 杏林大学外国語学部

本研究ではビデオ会議を用いて英語でスピーチを行った際、話者のみの映像を表示する群と話者と視聴者の映像を表示する群のスピーチの自己評価と画面に表示される映像視聴時に生じる感情を検証した。スピーチの自己評価は、話者の映像のみを表示する群（実験群）の方が高かった項目が6つあり、画面上の情報量が少ない方がスピーチの場合は向いていると思われる。また、自分の映像を見た時に生じる感情は群による差はなかったが、相手の映像を見た時に生じる感情は、話者のみの映像が表示される場合（実験群）は恐れ、悲しみの感情が高くなり、話者と視聴者の映像が表示される場合（統制群）は期待の感情が高くなることわかった。コミュニケーションの手段としては視聴者の映像が表示される方が良いことの現れであると考えられる。そして、ビデオ会議でペアになりスピーチをする際、自分の映像、相手の映像、原稿とで注目している度合いに差はなかった。

キーワード：スピーチ、映像、振り返り、感情、ビデオ会議

1. はじめに

オンライン上でコミュニケーションを取る際、社会的存在感を感じる事が重要であり（山田・北村，2010），ビデオ会議時も同様であると考えられる。リーブス・ナス（2001）によると、映像視聴時にネガティブなものに注目し、記憶に残りやすいとされる。自己の映像視聴時に嫌悪や羞恥の感情が生じることが多く、ビデオ会議時に自己の映像を視聴することでネガティブな感情が生じ、会議の内容よりも自己の映像に注目するのではないかと考えられる。

録画した映像の場合、ペアで相互に行ったプレゼンテーションの映像についてフィードバックを受ける群はパートナーの良かった点、および改善点を確認後にポジティブな感情が生じ、自分の映像の改善点を確認後にネガティブな感情が生じ、映像を視聴するのみでフィードバックを受けない群は自分の改善点を確認後にポジティブな感情が生じ、自分の良かった点を確認後、およびパートナーの良かった点を確認後にネガティブな感情が生じていることが分かっている（小林，2020）。

映像視聴時にネガティブな感情が生じているなら、それを取り除くことでよりビデオ会議の内容に集中することができると仮定し、本研究ではビデオ会議時に視聴者の映像の有無により、どのような感情が生じるかを検証した。

2. 方法

日本の大学に所属する学生74名（男性37名，女性37名）を実験群（男性18名，女性18名）と統制群（男性19名，女性19名）に分け、ビデオ会議システムのひとつであるZoomを使用して実験を行った。ブレイクアウトセッションの機能を用いてペアを作り、交互に英語でスピーチをしてもらった。実験群は話者の映像のみを表示し、統制群は話者

と視聴者の両方の映像を表示した。スピーチ終了後、各自スピーチについて自己評価を行った。

自己評価項目は19項目あり、5段階で回答してもらった。「プレゼンテーションについて、よく準備をした。／暗記できた。／内容が適切だった。／自信を持って発表できた。／快適だった。（緊張などせず、気持ちよくできたかどうか）／アイコンタクトを取ることができた。／ジェスチャーが適切だった。／表情が適切だった。／身だしなみが適切だった。／姿勢が良かった。／声の大きさが適切だった。／声ははっきりしていた。／流暢だった。／発音が適切だった。（カタカナ英語ではなかったかどうか）／イントネーションが適切だった。（疑問文ではない所で上がらない、など）／トーンが適切だった。（低すぎない声だったかどうか）／間が適切だった。／伝えたいことが伝わった。／全体的に見て、適切にコミュニケーションを取ることができた。」また、どのような感情が生じるかを調査するために、喜び、信頼、恐れ、驚き、悲しみ、嫌悪、怒り、期待、罪悪の9種類について、7段階で回答してもらった。さらに、ビデオ会議時に一つの画面に話者の映像・アイコン、視聴者の映像・アイコン、スピーチの原稿を表示させ、どこにどの程度注目していたか、5段階で回答してもらった。

3. 結果

ビデオ会議時に話者の映像のみを表示する実験群と話者と視聴者の両方の映像を表示する統制群のスピーチの自己評価と生じた感情を比較した。交互に英語でスピーチをしており、それぞれ話者と視聴者が存在するが、話者のデータのみ提示する。

3.1 スピーチの自己評価の比較

実験群と統制群のスピーチの自己評価をt検定を用いて比較したところ、話者の映像のみを表示する群（実験群）が「暗記できた、自信を持って発表できた、アイコンタクトを取ることができた、姿勢が良かった、声の大きさが適切だった、声ははっきりしていた」という6つの項目で5%水準で自己評価が高くなった。

3.2 自己の映像視聴後に生じる感情の比較

実験群と統制群の自己の映像視聴後に生じた感情をt検定を用いて比較したところ、有意差のある項目はなかった。

3.3 相手の映像視聴後に生じる感情の比較

実験群と統制群の相手の映像視聴後に生じた感情をt検定を用いて比較したところ、話者の映像のみを表示する群（実験群）が「恐れ」と「悲しみ」について5%水準で有意に高かった。また、話者と視聴者の両方が映像を表示する群（統制群）は「期待」について5%水準で有意に高かった。

3.4 画面の注目している場所の比較

自分の映像、相手の映像、原稿のどこに注目するかt検定を用いて比較したところ、実験群と統制群共に有意差は見られなかった。また、実験群と統制群の間にも有意差はなかった。

4. 考察

4.1 スピーチの自己評価の比較

話者の映像のみを表示する群（実験群）の方が自己評価が高かったということは、映像

が複数あることで情報量が増え、スピーチ以外にも注意が向いてしまったのではないかと考えられる。スピーチのように何かを伝達したいような場合は話者の映像のみで十分なのだろう。小林（2018）ではプレゼンテーションを聞いている人が頷きながら聞く、無反応の2群の自己評価を比較したところ有意差はなかったことから、視聴者や聴衆の存在は重要ではないと考えられる。

4.2 映像視聴後に生じる感情の比較

話者の映像のみを表示する群（実験群）が「恐れ」と「悲しみ」について高かったということは、ビデオ会議がコミュニケーションの手段のひとつと考えると、相手（視聴者）の映像が表示されないことでネガティブな感情が生じるのではないだろうか。

一方、話者と視聴者の両方が映像を表示する群（統制群）が「期待」について高かったということは、視聴者の映像が表示されることでポジティブな感情が生じたということではないかと考えられる。社会的存在感の観点からも相手の映像は必要なのだろう。

5. まとめ

ビデオ会議を用いてペアで英語でスピーチをした際のスピーチの自己評価と生じる感情を検証した。話者の映像のみを表示する群（実験群）と話者と視聴者の両方の映像を表示する群（統制群）を比較したところ、話者の映像のみを表示する群（実験群）の方が自己評価が高かった項目が6つあった。また、自分の映像を見た時に生じる感情は環境による差はなかったが、相手の映像を見た時に生じる感情は、話者のみの映像が表示される場合（実験群）は恐れ、悲しみの感情が高くなり、話者と視聴者の映像が表示される場合（統制群）は期待の感情が高くなることがわかった。そして、ビデオ会議でペアになりスピーチをする際、自分の映像、相手の映像、原稿とで注目している度合いに差はなかった。

今後の課題として、生じる感情がコミュニケーションの文脈によるものか、社会的存在感の影響なのかを検証したい。

参考文献

- 小林輝美（2020）自己の映像を利用した英語プレゼンテーション改善に関する研究—フィードバックの有無による自己評価、および映像視聴時に生じる感情の比較—, 教育テスト研究センター年報, 5: 57-59
- 小林輝美（2018）自己の映像を利用した英語プレゼンテーション改善に関する研究—フィードバック方法による違いの検証—, 教育テスト研究センター年報, 3: 43-45
- バイロン・リーブス, クリフォード・ナス著, 細馬宏通訳. (2001)人はなぜコンピューターを人間として扱うか—「メディアの等式」の心理学. 翔泳社.
- 山田政寛, 北村智 (2010) CSCL 研究における「社会的存在感」概念に関する一検討. 日本教育工学会論文誌33 (3), 353-362

